10. 生物工学研究会

10.1 設 立

生物工学研究会の前身のバイオ・メディカル・エレクトロニクス (BME) 研究会は昭和 60 年 (1985 年) に誕生した。

当時、日米の電気化学合同大会をひかえ、アメリカ側の Biological and Organic Electrochemistry Devision に対応する研究会を作ろうということで設立された。主査は鈴木周一氏で、幹事は平沢 冷、軽部征夫、相沢益男の諸氏が務めた。事務局は東大教養学部の平沢研究室に置かれた。生物のしくみや反応を電気化学の立場から解明し、その応用をはかる生物電気化学、電気化学の方法論や考え方を縦横に駆使して発展してきたメディカルエレクトロニクス、さらに、これらの融合を目指したバイオエレクトロニクスなどの研究を推進すべく、設立された。

こうした活動を通じて、生物の機能に対する理解は飛躍的に高まり、また研究を支援する関連技術の進展にも目をみはるものがあり、その結果、生物に関わる研究分野はますます多岐にわたるようになった。すなわち、電気化学をはじめ、医学、薬学、生物学、生理学、生化学、酵素工学、高分子化学、医用工学、分析化学、計測化学、電子工学、制御工学、エネルギー化学などの各分野、さらには、それらの境界領域へと広がっている。こうした背景をもとに BME 研究会はより広範な分野から多くの人々に参加していただけるように、平成元年度名称を生物工学研究会に変更した。主査は引き続き鈴木周一氏が務め、新たに運営委員会を、委員長に相沢益男氏、委員に平沢 冷、軽部征夫、松岡英明、山内 繁、長 哲郎の諸氏が、松永 是氏が幹事となって事務局は松永研究室(東京農工大工)が担当した。

10.2 活 動

昭和 60 年に BME 研究会が設立して以来、毎年、バイオ、メディカル、エレ

クトロニクスの各分野で活発に研究されている研究者、技術者を招いて年2～3回のペースで講演会を行い、研究討論を重ねてきた。

また、昭和60年の電気化学協会第52回大会以来、毎年春と秋の大会でシンポジウムを主催し、当初の目的であったアメリカ側の Division に対応する組織としての役割もかなり果たせるようになってきた。平成5年の日米電気化学合同大会では、従来の生物・有機電気化学関連のシンポジウムに加え、生物工学研究会で新たに“Electrochemistry of Cell and Organelle”を提案し、36件の講演応募があり、盛大に行われる予定である。

以下に、これまでの活動の概要を示す。

本会大会時のシンポジウム：昭和60年講演40件、61年講演41件、62年講演29件、63年講演56件、招待講演5件、平成元年講演63件、招待講演4件、2年講演69件、招待講演5件、3年講演61件、招待講演4件、4年講演56件、招待講演4件

BME研究会講演会：昭和60年1回、61年3回、62年1回

生物工学研究会講演会：平成2年3回、3年2回、4年1回。その他CO₂固定化研究会（平成2,3年）共催

（鈴木 周一）

11. 有機エレクトロニクス研究会

11.1 設立と活動

本研究会（主査：小門 宏（東工大））の設置が協会に申請され、認められたのは昭和62年（1987年）である。有機物を用いた目新しく、そして魅力的な結果が芽を吹いた時期であった。一方ではさまざまな実験技法の精度が、エレクトロニクスの進歩によって向上した頃でもあった。LB膜の実験テクニックが本格的普及を始め、分子の配向制御に関心が高まったこともそのひとつであった。他方ではドーブド・ポリアセチレンを初めとする一次元導電性ポリマーが本物であるとの認識が一般化していた。さらにバイオ素子の開発も活発化し、アメ